

# 偕老同穴、今は昔？

主席研究員 小谷 みどり

## <祭祀財産としての墓>

日本の墓制度は何々家という枠組みで、子々孫々継承されることを前提としている。お墓の継承について、民法第八九七条では、このように規定している。

①系譜、祭具及び墳墓の所有権は、前条の規定にかかわらず、慣習に従って祖先の祭祀を主宰すべき者がこれを承継する。但し、被相続人の指定に従って祖先の主宰すべき者があるときは、その者が、これを承継する。

②前項本文の場合において慣習が明らかでないときは、前項の権利を承継すべき者は、家庭裁判所がこれを定める。

つまり民法では、お墓を祭祀財産と規定し、不動産や株券、現金などの相続財産とは別のものと位置づけている。しかし先祖祭祀を承継する人は、慣習に従って定めると規定しているだけで、具体的にどういう立場にある人が継承すべきかには言及していない。

では、「慣習」とは何か。現行の民法は、第二次世界大戦後の1948年に制定されたが、それ以前の明治民法下では、お墓を継承する人は家督相続人、つまり長男子と考えられていた。その意識が「慣習」として今なお現存しており、お墓は長男子が継承するものだと考えている人は多い。

一方、家族のあり方は、家制度から夫婦家族制（夫婦の一方か双方の死亡で消滅する一代限りの家族）に移行し、家制度は消滅した。しかし、現行の墓地制度は子々孫々での継承を前提としているため、戦後の新しい家族の概念とは合致していないという制度上の矛盾点がある。

## <伝統的な墓意識の揺らぎ>

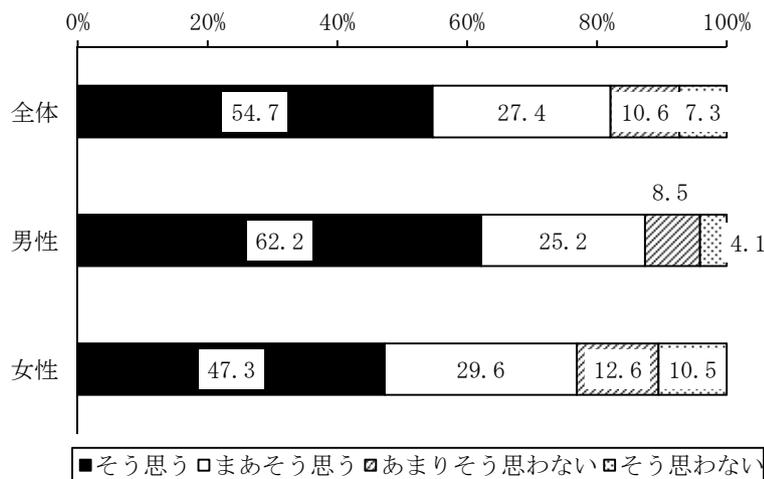
戦後70年が経ち、意識のうえでも家制度が希薄化してきたうえ、家族のあり方やライフスタイルが多様化し、ここに来て、従来の日本人の価値観を転換すべき問題がさまざまに露呈してきている。墓を継承する人がいないという問題もその一つである。

同時に、伝統的な墓意識も揺らいでいる。たとえば、夫婦が共に老い、死後は同じ墓に葬られることを意味する「偕老同穴」という考え方について、必ずしも支持しない人たちが女性の中には少なくない。

当研究所が60歳から79歳までの有配偶男女に対して実施した調査結果では、一般

論として、夫婦は同じお墓に入るべきかをたずねたところ、54.7%が「そう思う」と回答し、「まあそう思う」(27.4%)と合わせると72.1%が入るべきだと考えていた(図表1)。しかし性別にみると、男性では62.2%が「そう思う」のに対し、女性では47.3%と半数を下回っていた。「あまりそう思わない」「そう思わない」女性は、合わせて23.1%おり、女性のうち4、5人に1人は、夫婦は同じお墓に入るべきだとは考えていなかった。

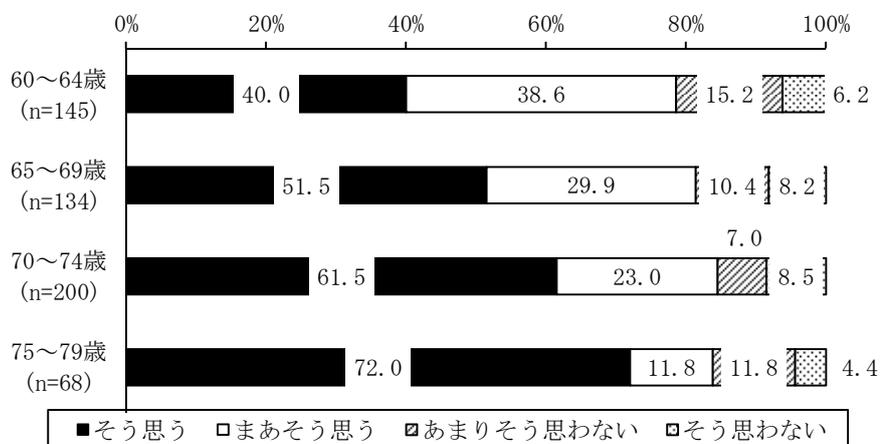
図表1 夫婦は同じお墓に入るべきか(全体、性別)



資料:第一生命経済研究所「人付き合いに関する意識調査」。調査対象者は全国の60・70代男女600名。調査時期は2014年11月で、当研究所の調査モニターに郵送調査で実施した。

また年齢層別では、年齢が高い人ほど夫婦が同じお墓に入るべきだとする人の割合が高く、60～64歳では「そう思う」と回答した人が40.0%だったのに対し、75～79歳では72.0%にもものぼり、30ポイント以上の開きがあった(図表2)。

図表2 夫婦は同じお墓に入るべきか(年齢層別)



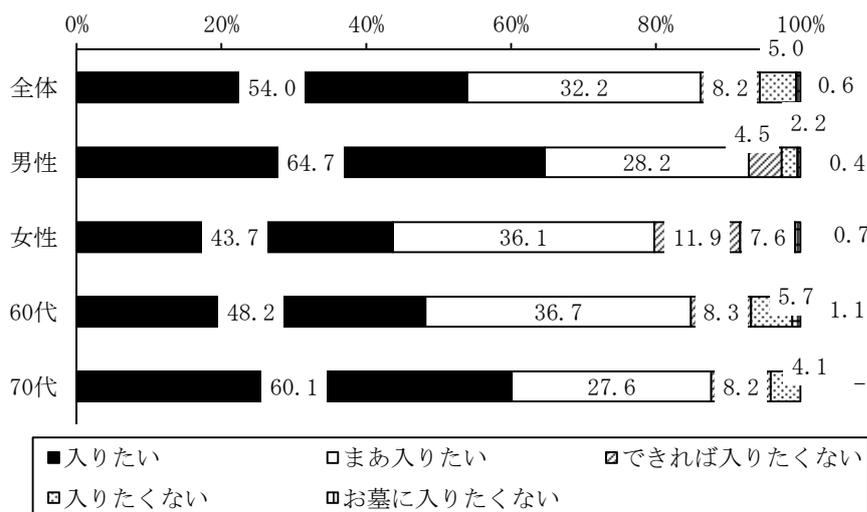
資料:図表1と同じ

年齢・性別でみると、60代前半の女性では、「あまりそう思わない」「そう思わない」の合計が31.3%もあり、同じお墓に入るべきだと思えない人が多く（図表省略）、団塊の世代あたりの女性では、「妻は夫と同じお墓に入るべき」といった価値観を持たない人が少なくない。

では実際に、現在の配偶者と同じお墓に入りたいと思っているのだろうか。前出の調査結果によれば、「入りたい」と回答した人は54.0%と過半数を占めたが、性別にみると、「入りたい」と回答した男性は64.7%いたのに対し、女性では43.7%と半数を下回った（図表3）。

年齢層別にみると、「入りたい」と回答した人は60代では48.2%にとどまったが、70代では60.1%と大きな開きがある。性・年齢層別にみると、60代女性で、「入りたい」人が37.9%しかおらず、「できれば入りたくない」（12.4%）、「入りたくない」（9.7%）を合わせると、22.1%が夫と入りたくないと考えていた（図表省略）。

図表3 配偶者と同じお墓に入りたいか（性別、年齢層別）



資料:図表1と同じ

### <夫婦別墓の背景>

以上のように、わが国ではこれまで「夫婦で一緒のお墓に入るのは当然だ」とされてきたが、昨今、こうした意識を支持しない女性が出現してきた。この背景には何があるのだろうか。

長男である夫と結婚した女性にとって、夫と同じお墓に入るということは、夫の先祖と同じお墓に入るということでもある。しかし核家族や夫婦単位の家族という考え方が当たり前になった現代において、「これはおかしい！」と声をあげる女性たちが出てきたのである。夫の先祖との「同居」を忌避する『脱家墓タイプ』は、脱家意識の

延長で誕生したともいえる。

一方、「夫と同じお墓に入りたくない」という意識には、夫との「同居」を忌避する『あの世離婚タイプ』もある。『脱家墓タイプ』は夫婦で同じお墓に入ること自体を否定しているわけではないが、『あの世離婚タイプ』は、「どんなお墓であっても、夫と一緒にイヤ」と考えるのが特徴だ。このタイプは、これまで離婚がタブーとされてきた時代に生きてきた年配者女性にも多い。今すぐに離婚するほどではないが（経済的理由で離婚できないという問題もあろう）、漠然とした夫への不満が、妻に「夫婦別墓」という意識へと向かわせている様子が見えてくる。

高度成長期を支えてきた人たちが定年を迎えた 1980 年代後半に入って、退職後の生活を思い描くなかで、自分の最期をどう迎え、お葬式やお墓をどうするかを自ら考える人たちが増えてきた。数年前には「終活」という新語も誕生し、元気なうちに、自分が入るお墓を建てたり、準備をしたりすることが当たり前になりつつある。その結果、墓を死後の住処と捉える人が増え、高齢者にとって「死後、誰とどんな墓に入るか」を考えることは、ライフデザインの重要な事項にさえなっている。

お墓に入ることによって生じる人間関係や子孫への負担などの問題を回避するため、散骨、合葬墓など、そもそも家の枠組みでの継承を前提としたお墓には入らないことを選択する人も増えている。今後、「夫婦は同じお墓に入る」、「妻は夫の先祖のお墓に入る」といった慣習によらない形態は、価値観や生き方の多様化とあいまって、確実に増えていくだろう。

(研究開発室 こたに みどり)